

青の家始末記 寺田健一部

青の家という共同アトリエを作ったことがある。場所は新天町のウラ、現在の千鳥屋本舗のヨコ。火事になる前に安川洋裁学校があった所である。今でこそ土一升金一升どころではない天神町かいわいだが、昭和二十八年ごろは、まだごみごみした建て物の間にそれくらいの空題は珍しくなかった。行政上は市の土地らしかったが、三年後にとりこわすまでは「どこからも文句が言ってこなかったから、今だに正確な持ち主は知らない。

とにかく空地があるから、ここに自分たちのアトリエを作ろうと、無鉄砲な計画をたてたのが「NとY、それに私。いずれも二科に出品し始めて二、三年の生意気盛りの青年である。大工に頼む金はない。一週間かかって、とにかく屋根のある四坪のバラックができた。少々かたむいているが、ちゃんと窓もある。といってもガラスをはめこむ技術がないのでビニール張りである。電灯もひいたが電気代を一回も払わないので、三カ月目に送電をとめられた。

入り口のドアだけはペンキをぬり、きどってメイゾン・ド・ブルーと横文字を書いた。建築材料の費用は師匠のI先生と彫刻のH先生に小品をいただき、売りこみのうまいYがそれを中洲のバーで金にかえた。

通風がきかないので、すわっていてもじつとりと汗ばむ真夏の制作にたえきれなくなると、「新天町の通路にどっかりと置いてある氷柱を、少しばかり彫刻用のノミでかいて、しっけいしてきた。三人の中で年少の私が、いつもその役割りをふりあてられた。

まだヤミ市の雰囲気(ふんいき)が残っていたこのあたりで、新天町だけは貴婦人のようにはなやかであったが、貧乏な私たちには縁がなかった。共同生活は一年続いた。医学生だったNは、神科医として横浜へ去り、彫刻をやっていたYは、マネキンデザイナーとして人形店へ招かれ、残った私は、また学校へ戻った。

主のいなくなったアトリエは、月千円の約束で独立に出していたKに貸した。家賃を一回だけ払ったKも、一年後には上京し、現在はニューヨークに在住している。来年は六年ぶりに帰ってくるという。高層ビル化し、全館冷房がきいて、氷柱をしっけいする楽しみがなくなった新天町の変わり方に驚くことだろう。